

比較文化Ⅱ [第7回]

丸山純 (jun@site-shara.net)

●ヨーロッパとイスラームの深い関係

▼ヨーロッパ文明の根幹はイスラーム世界経由

近代ヨーロッパ文明は、イスラームとの交流なくしては成立しなかった
 西洋的な知の体系……哲学、自然科学、医学の源流は、古代ギリシャ
 アリストテレス、ユークリッド、ヒポクラテス、プトレマイオス
 アッバース朝下（8～9c）のバグダードで、アラビア語に翻訳
 カリフ・マアムーン「知恵の館」……図書館と研究所を兼ねた機関
 それらの業績が12世紀になってヨーロッパに伝えられ、ルネサンスで再び開花

▼支配者となったヨーロッパ

科学技術の進歩は、富と力の集積をヨーロッパにもたらす
 イスラーム文明に対して傲慢な態度をとるようになる
 啓蒙主義の芽生え
 もはや我々は神を必要としない、人間の理性と叡智によって、ものごとを理解できる
 教会の権力からの解放、神学からの解放、合理主義を発達させる原動力

▼移民の大地となったヨーロッパ

二次大戦終了時から多くのムスリムがヨーロッパに移民として渡った
 ヨーロッパは「ヨーロッパ人」の大地ではなくなった
 移民たちは宗主国をめざした
 植民地統治のおかげで英語やフランス語をあるていど話すことができた
 植民地支配を歴史的に正当化するには、宗主国側が受け入れに寛容にならざるをえなかった
 移民による送金は、彼らを送り出した国の貿易収支の赤字を十分に補填するぐらい巨額になった

第二次世界大戦の戦後復興に必要な労働力を安く無尽蔵に調達できる
 少子高齢化の進行
 重労働や危険な仕事を嫌う傾向

▼どのくらいのムスリムが現実にヨーロッパで暮らしているかを示す統計はない

ヨーロッパで生まれた二世以降については、外国人の扱いをしていない国も多い
 フランスには400～500万人、ヨーロッパでもっとも多い
 ドイツにもトルコ出身者だけで260万人、全体では300万人を上回るムスリムがいる
 西ヨーロッパ全体では、1500万とも2000万ともいわれている

▼転機となった1973年

第一次石油危機で大きな打撃を受け、景気が後退
 1960年代から勢いに乗っていた移民受け入れをあわてて停止
 ドイツではトルコ人労働者が100万人に達していた
 合法的に滞在している者は「家族の追加的移住」を要求することができ、家族の呼び寄せが始まった
 受け入れ国側の事情だけで一方的に送還することはできなかった
 移民には多くのムスリムが存在したので、ヨーロッパ社会はイスラーム社会を内包することになった

▼もうひとつの転機が冷戦の終結

冷戦の終焉とともに、世界各地で多発するようになった民族紛争の結果、多くの難民がヨーロッパをめざした
 旧ユーゴスラビア内戦
 フセイン政権下で迫害されていたクルド人
 北アフリカからジブラルタル海峡を越えてスペインへ渡る人たち
 アルバニアからイタリアを目指す人たち
 難民なのか、不法移民なのかを判別することは、きわめて困難
 イスラーム脅威論が諸国に蔓延しはじめ、2001年の9.11以降、さらに強まる

●ドイツ……内と外とを隔てる壁のある社会

▼ナチスへの反省から、人道的な憲法をもつ

ナチスへの反省から、民族差別を監視する憲法擁護庁があるほど人種・民族差別を許さないという意識が強い

ドイツ基本法第16条a……世界のどこにいる人間でも迫害を受けたらドイツに庇護を求める権利を明記

排外主義が90年代より強くなる

▼統一前の西ドイツは、深刻な労働力不足に直面

戦争で若い働き手を失った

東ドイツ（ソ連支配地域）と西ドイツ（連合軍支配地域）に分割された

労働者不足を補ったのが、地中海沿岸諸国からの出稼ぎ労働者

スペイン、ギリシャ、ポルトガル、イタリア、ユーゴスラヴィア、トルコ

トルコと西ドイツは1961年に雇用双務協定を締結し、大規模な移民がトルコから西ドイツへと向かう

1973年、第一次石油危機の発生とともに低成長・高失業の時代に入ったドイツは、外国人労働者の募集を停止

その後に「家族の再統合」の権利を行使して、母国から家族の追加的移住がいつせいに始まった

▼トルコ人・ゲッターへの集住が進む

移民労働者と職場が競合していたドイツ人には、低賃金で働く外国人労働者の存在は目障り

外国人憎悪の声があがり、それを極右勢力（ネオ・ナチ）が取り込んでいくことに

移民の存在を快く思わない人々は、帰国させることができないのなら、せめて自分たちの目に付く場所には暮らさず、移民街に閉じこもってくれることを臨んだ

ドイツ社会に生きていくのだから、ドイツ社会に共有される価値観や規範を受け入れ、ドイツ語を学び、ドイツの文化にも親しんでほしいと考えるドイツ人は多い

だが、住民の反対で、ドイツ人の集合住宅に入居することが難しかった

週末になると、友人や親戚が集まり、深夜遅くまで談笑

臭いの強い香辛料を使い、とくにニンニクの臭いが建物に充満

子どもが多くて騒々しい

街頭にたむろしているのが気味悪い

日曜日にも仕事や家事をする

住環境は悪くても、家賃の安い移民街に住み続けたほうが、ずっと気が楽

母語で話せる相手が周囲にいる環境は快適

トルコ系移民が集中するにつれて、ムスリムである彼らに必要なモスク、食料品や生活必需品を売る店も増えていく

▼「ドイツ化」することへの懸念

親たちは、子どもの配偶者をドイツではなく、郷里の親戚や知人から選ぼうとした

ドイツで育った若者たちが「ドイツ人化」しているのではないかと危機

無神論者になってしまったのではないか

個人主義を好んで、家族主義のトルコ人とは合わないのではないか

結婚前に男女とも異性との交際を繰り返したのではないか

二世の多くは高学歴に達しなかった

ドイツでは初等教育を終えると、基幹学校と実科学校、ギムナジウムに分かれ、将来の進路が決まってしまう

ドイツ社会でコンプレックスにさいなまれていた男たちは、家庭のなかで家父長的に振る舞うことを願っていた

彼らは親の希望通り、母国トルコから教育レベルの高くない配偶者を迎える選択をした
突然異郷の地にやってきた花嫁にとって、母語で生活できる移民街はありがたいもの

ドイツ語を解さない母親は、就学前の子どものドイツ語教育には何の貢献もできない

行政は、ドイツ語習得のために、就学前教育、幼稚園に通わせるよう親を説得

しかし、ドイツは彼らを社会の一員とはみなさなかったため、親たちは躊躇

このままドイツ人として生きる道を選択するなら、ドイツ語を重視するが、いつか母国に帰るかもしれないとなると、トルコ語が必要

▼血統主義的な民族概念

「ドイツ人」の定義には、代々ドイツ人の血を受け継ぐという「血統主義的な民族概念」が含まれている

ドイツ基本法116条の規定……「ドイツ民族性を有する難民とその直系卑属はドイツへの帰還が権利として保障されていた

血統主義を強く打ち出して「国民」を定義するのは、ヨーロッパでも特異な部類

ベルリンの壁が消えたことで、旧東ドイツ市民の不満は外国人に向けられた

自分たちドイツ人に職がないのに、なぜトルコ人は働いているのか

以前からあった「多すぎる外国人」への潜在的不満に、統一による経済的混乱と外国人の流入が重なって、外国人憎悪は一気に加速される結果となった

極右勢力のネオ・ナチの伸張

「トルコ人は出て行け、外国人は出て行け。ドイツはドイツ人のものだ」

極右政党は排外的な主張をして、憲法裁判所によって解散 → 地下に潜行

右派政党はストレートな表現を避けつつ、国民の間に鬱積する外国人への不満を吸い上げようとしてきた

ドイツ社会自身が、異民族や異文化と共存していく発想を自らのうちに持っていない

▼移民なしでは成り立たない現実

社会民主党や緑の党のような左派勢力は、ドイツが、多民族・多文化の社会になっている現実を受け入れる必要があると主張

製造業、サービス産業、建設業、医療スタッフ

移民なしには充実した医療サービスも受けられない

少子高齢化が進み、この状況で年金制度を維持するためには、合法的に働く移民を一定数確保して、彼らに保険料を負担してもらうことが不可欠だという認識は、すでにEU全体で共有されている

不法就労者や不法滞在者への摘発を強化すると同時に、合法的に滞在する移民は積極的に受け入れるというのは、EU加盟国の基本的な合意となっている

▼「同化」ではなく「統合」が求められているはずだが

ナチス・ドイツが人種的特徴を共有する現地の人々を勝手に「ドイツ民族」と決めつけて強制的に「同化」させるという政策を行なったという忌まわしい過去があるので、ドイツでは決して「同化」という言葉は使わない

「統合」とは外国人がドイツ語を習得して職業訓練を受け、ドイツ社会にしかるべき位置を占めていくこと

移民たちはまず文化的・社会的同化を求められた

夜は家で静かに過ごすこと／臭いの強い食材は使わないこと／秩序だった運転をすること／日曜日には家事を含めて働かないこと

文化的・宗教的な距離の大きいトルコ系移民は、ドイツ社会からの「同化」の要求に従うこ

とができなかった

文化や社会に関する行動の規範は、イスラームに由来していることが多い

多くのトルコ人は、「同化」ではなく「居てほしくない」がドイツ社会の本音だと確信

「ドイツ人と親友になれるかと問われるなら、絶対になれると答えざるをえない」

「いつトルコに帰るのか」と常に聞かれる（トルコ系実業家談）

Gastarbeiter＝一時的労働者

「ドイツ人に思いやりが欠けているとは言わないが、相手がトルコ人の場合には働かない——それがドイツ人というものだ」

ドイツでは、外国人憎悪（Ausländerfeindlichkeit）が顕在化することは今までもたびたびあったが、宗教に対する嫌悪感が表に出ることなかった

9.11（2001年）以降、あらゆる政治勢力が、ムスリムのスカーフを学校や公的機関から追放すると主張し始めた

イスラモフォビア（イスラーム恐怖症：Islamophobia）

民主的勢力（左派）ほどイスラームを人権抑圧の宗教、判民主的宗教と認識する傾向は強い

イスラームが男尊女卑で性差別を是認する宗教だと断定し、女性が被るスカーフやヴェールを人権抑圧の象徴とみなしている

難民問題をきっかけに、いまイスラーム差別や攻撃が激しくなっている

ネオ・ナチ、PEGIDA、NPD

▼イスラームに回帰することで、心の平安が得られる

後に家族とともに定住するようになってから、トルコ人をはじめとするムスリムは、徐々にムスリムとしての信仰実践に励むようになった

モスクに行くと、初めて自分が人間として必要とされている感覚に目覚める

ドイツ語や外国語を教えたり、コンピュータの使い方を教えたりする

信仰の中に心の安らぎを得た

信仰実践に熱心になるにつれて、現世の国家への帰属意識は相対的に小さくなり、国家や民族を超越した信徒の一体性をよりどころとするようになっていく

民族意識は薄れ、住んでいるヨーロッパのホスト国への帰属意識も薄れていく

ドイツでは、ホスト社会からの疎外感や差別が、ムスリムとしての覚醒と組織化に拍車をかけることになった

やがてそのなかから、過激主義へ接近する例も出てくる

●フランス……コミュニティ形成を認めない社会

▼「人は生まれながらにして自由かつ平等の権利を有する」

1789年採択の人権宣言の精神を受け継ぎ、移民にも平等に国籍を与えて同化を促進

人種、民族、出身の国家を問わず、誰でもフランス共和国と契約を結べば、「一個人として」フランス市民になれる

出生地主義

フランスで生まれ育ち、フランスの公教育を受けた人には容易に国籍を認めてきた

難民に対しても人道主義にもとづいて受け入れに寛容

▼移民コミュニティの形成を決して認めないフランス社会

移民たちが、出自の宗教、民族、文化などを軸に結束し、コミュニティを形成してフランス社会に参加することを決して認めない

フランス共和国の一体性が崩壊する

移民たちがもっている宗教や文化を捨てることが、明示的ではないにせよ含意

同化を強制

▼石油危機で受け入れ施策が激変

第二次世界大戦後の経済成長期には、安価な労働力が必要とされた

旧植民地からの移民がフランス経済を支えてきた

アルジェリア、チュニジア、モロッコなどの地中海沿岸諸国

セネガル、モーリタニア、ニジェール、マリなど西アフリカ諸国

石油危機後の1974年、国境の閉鎖と就労目的の移民の受け入れを停止

既に入国している移民の家族呼び寄せは許容

外国人労働者の数に変化はないが、移民の数は増加

▼2005年10月27日の「郊外」暴動事件

3人の北アフリカ系の若者が職務質問され、変電所へ逃げ込んで感電死

移民の若者たちが警察隊への暴動を起こし、フランスの主な都市に次々と拡散
ハンガリー系移民出身のサルゴジ内相の発言が火に油を注ぐ

「暴動を起こした若者は努力の足りないごろつき」

「それならフランスから出て行け」

サルゴジ人気が高まり、右派勢力を取り込んで、2007年には大統領に

フランス化できた移民とフランス化できずに底辺に取り残された移民のあいだの溝が深まる

▼フランスの大原則「ライシテ」（聖俗分離）との衝突

フランス革命時に、カトリックの聖職者たちの特権と腐敗を糾弾

→ 教会と国家を分離

1905年にはライシテの原則を定めた「教会と国家の分離法」が制定

公的領域における非宗教性を確保したうえで、個人の信教の自由を認める

学校にキリストやマリア像を設置できず、十字架さえも掲げることはできない

「これみよがし」な宗教的表象はいっさい禁止

本来イスラームには存在しない聖俗分離を、ライシテという国家原則として受け入れさせようとしているので、ホスト社会とムスリム移民社会は、信仰の本質にかかわる部分で衝突する

▼スカーフ問題からヴェール禁止法へ

1989年、パリ郊外クレイユの公立中学校校長が、授業中にヴェールを脱がなかったマグリブ系移民の女生徒の登校を認めなかった

ヴェールは宗教的表象に相当する → 親たちが不満の声をあげた

「憲法で認められている信教の自由を侵害」vs「フランス憲法の原則であるライシテの遵守」

「公教育の役務に支障をきたさないという条件下においてのみ、着用を必ずしも禁止しない」

政府の公式見解に落ち着く

あくまでもライシテの原則に従わせるべきだが、「啓蒙の機会」を奪うとムスリムはいつそう、閉鎖的なコミュニティに閉じこもってしまう危険があるから、教育の機会を与えるほうを重視

2004年の「ヴェール禁止法」……公立校における宗教的表象の着用を禁じる

▼ブルカ禁止法の論争

2011年の「ブルカ・ニカブ禁止法」……公共の場で顔を隠すことを禁止

違反者には150ユーロ（1万8000円）の罰金

実際に「ブルカ」や「ニカブ」を着用している女性は2000人に満たない

ベルギーでも制定され、後にイタリア、スイス、デンマーク、トルコやロシアの一部地域でも同様の法律が制定

女性の人権活動家たちは、同法を男性中心主義的な文化の強制から女性を解放するものであると評価

パキスタン出身のフランス人女性が、欧州人権裁判所に「ブルカ禁止法」が差別を含むとして訴え

プライバシーの権利や思想、良心、宗教、言論の自由に反し、差別的である

家族や近親者からブルカ着用を強制された訳ではなく、治安上の理由で必要なときは脱いでも構わない

フランス政府は、ムスリム女性への差別を意図したものではなく、公の場でのあらゆるベールの着用を禁ずるものであり、バイクに乗る時以外のフードやヘルメットの着用も禁ずるものである、着用禁止は思想・良心・信教の自由を侵害していないことを主張

欧州人権裁判所は、全会一致で、原告女性は差別の対象ではなく、同法律は人々が共に生きる社会を維持する上で合法であるとの判断

国際人権NGO アムネスティ・インターナショナルは、今回の判決は表現の自由、信仰の自由を著しく侵害するものであるとの声明を発表

▼積極的差別是正政策がとれない

アメリカのように、黒人やヒスパニック系住民に対する差別はたしかに存在すると国家が認めてしまえば、積極的差別是正政策（アファーマティブ・アクション）を実施することができる

フランスはコミュニティ単位の社会統合を認めないから暴動を招いたのだという点は、アメリカのメディアからしばしば指摘されてきた

フランスにとって、大原則である「一個人としての統合」を崩すことはできない

黒人のような人種を対象に差別是正策をとることは、論理的には可能だが、民族を単位とするコミュニティとなると、難しい

アルジェリア一つとっても、フランス支配と戦った者もいれば、支配に協力した者もいる

植民地支配の歴史認識という困難な課題に直結する

宗教的アイデンティティを軸にしたコミュニティだけは受け入れない

失業者が急増するにつれ、少しずつ支持を広げる

2011年、三女のマリヌ・ル・ベンが新党首に

反ユダヤ発言を繰り返す父を除名して、現在は穏健路線を歩む

2012年フランス大統領選挙の第1回投票では、10人の候補者中3位に

若年層の支持率はトップ

2014年の統一地方選挙で大躍進し、14以上の自治体で第一党に

理想としてめざすのは、日本の自由民主党（安倍政権）

反リベラルの政策

EUからの離脱／反イスラーム／移民の制限／モスク建設の停止／伝統的な生活様式、とくに農業を重視／死刑復活／道徳の復権／同性婚優遇策の廃止／国籍は血統主義

▼近未来小説「服従」

ミシェル・ウエルベック著・大塚桃訳／河出書房新社

国民戦線が2022年の大統領選で第一党になったので、左派から右派までが大連立を組んでマリヌ・ル・ベンが大統領になるのを阻止し、穏健イスラームの少数党が政権を握る

▼極右政党・国民戦線の伸張

1972年10月にアルジェリア独立反対派などの極右勢力が集まって、ジャン＝マリー・ル・ベンが創設

イスラーム戦争の時代

――暴力の連鎖をどう解くか

内藤正典著／NHKブックス

昨年七月に起こったロンドンの同時多発テロ、秋にフランス各地で繰り広げられた移民による暴動、さらに今年になつて蒸し返されたムハンマド風刺画騒ぎと、このところ欧州とイスラームの対立が相次いでいる。著者は〇四年に前著『ヨーロッパとイスラーム』（岩波新書）を著わして、翌年に起こるこれらの事件を予告するかにように、欧州に潜在する諸問題を指摘した。その後の成果を加えた本書では、副題にもなった「暴力の連鎖をどう解くか」というデリケートで切実なテーマに、真つ向から取り組んでいる。

読み進むうちに、これほど複雑な内容を本書がじつに平明な言葉で語っていることにまず驚いた。イスラームの教義や思想を詳しく伝えようとすると、なんて特異な宗教なのだとかえつて敬遠されてしまいがちだが、本書ではムスリム（イスラーム教徒）たる者の心情や信条という、親しみやすい切り口から常に説明がなされるため、自然に理解と共感が深まっていく。各国で民衆のなかに分け入って話を聞き続けてきた、著者のフィールドワークの重さが背景に感じられる。

本書は六章から構成されるが、問題提起となる序章と第一章では、イスラームが単なる宗教ではなく、人生の規範そのものであることが、西欧との対比で鮮やかに浮き彫りにされる。イスラーム社会を貫く徹底した合理主義に、目からウロコとなる読者も少なくないだろう。そしてその合理性がゆえに、共同体を救おうとする動きがジハードに結び付いてしまいうすいことも納得がいくはずだ。

続く第二章では、いまだに宗主国意識から抜け出せない欧州各国が抱える、イスラーム系移民の受容と排斥の問題が取り上げられる。なかでも興味深いのが、多文化主義を掲げてきたオランダの変貌で、九・一一を機にムスリムに対する恐怖と憎悪が急速に高まった。多文化主義の相互不干渉が結果的に相互理解を阻んできたという指摘には、胸を突かれた。

第三章は、建国以来徹底して西欧化を進めてきたのに、なかなかEU加盟が認

められないトルコの現状の分析。もしこのまま加盟がかなわないと、トルコだけでなくイスラーム圏全体が、反欧州、反キリスト教に傾き、深刻な文明間の対立を招くことになるかと警告している。

そして和解の鍵を探る第四章では、世界を悩ますテロを防ぐには軍事力ではなく、欧米や自国政府によつて作り出された社会的な不正を正したいというムスリムたちの心情を汲み、相互理解をはかるしか道がないことが明らかにになる。

終章、著者は千年にわたつてムスリムとユダヤ教徒、キリスト教徒が混住してきたダマスカスの旧市街を回想し、その喧騒のなかに、国家の壁を越えて共生するための智慧を見る。（評・丸山 純）

ないとう・まさのり 一九五六年東京都生まれ。一橋大学大学院教授。主な著作に『アッラーのヨーロッパ』『なぜイスラームと衝突するのか』など。

（月刊『望星』・2006年8月号）

服従

ミシェル・ウエルベック著・大塚桃訳

河出書房新社

今年一月七日、シャルリー・エブド紙が襲撃された当日に刊行された近未来小説、ついにイスラーム政権が誕生したフランス社会を描く……という触れ込みで読み始めたのだが、二ページ目で、しまった、これは現代フランス文学だった、と気づいた。学生時代に読みふけたきりすつかり遠ざかった、あの知的で頹廢的で不条理な世界。となると、頭と心のモードを切り替えて臨まねばならない。

主人公はデカダン派作家ユイスマンスを専門とするパリ第三大学の教授で、教え子の女子学生をつまみ食いするのが生き甲斐という、よくあるフランスの中年「知識人」だ。移民が増え続けるなか、二〇二二年の大統領選では国民戦線が第一党となるが、EU離脱を主張する極右より「まだマシ」という究極の選択で、社会党から保守党までがイスラーム同胞党（架空）と大連立を組む。党首ベン・アリは国立行政学院出身の超エリートで、過激主義とは距離を置く穏健派。政権につくやいなや改革を実行し、移民の集住

する「郊外」の犯罪が激減、アラブ諸国からの支援で財政も潤い、失業者もいなくなるなど、現代フランスの病理や課題が次々と解決していく様は痛快だ。

町を行く女たちからスカート姿が消え、大学教員もムスリムでなければクビになる。主人公もいったんは職を辞し、後年カトリックに改宗したユイスマンスの足跡をたどるが、やがてパリに戻り、ソルボンヌ大学長の執拗な勧めで、イスラームに改宗して大学に戻る決心をする……のだが、彼の関心は唯一、一夫多妻制のもとで若い妻を持てるかどうかにある。

ムスリムなら憤慨する設定や表現も満載だが、西洋の皮相的なイスラーム理解をおちよくついているとも言える。人は何に「服従」するのか。神を棄てて凋落した西洋の疲弊と苦悩が、イスラームとの対比であぶり出される。（評・丸山 純）

（月刊『望星』・2015年12月号）